

講釋せんは、いとむつかしかりぬべし、菩提の道も疎ければ、西念淨蓮にても有るべからず、されば世の人のうへをみるに、金藏といふも貧に責められ、萬吉も不幸はのがれず、玉といふ下女、光もなく、かるとつけても尻重し、名はその人によらぬものかも、よしさらばたゞ調市走女も覺よく、娶も娘もかきやすからむをど、此日人のもとへ消息の筆にまかせて、たゞ暮水とは書きはじめける、それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此語によるならむと、蛇に足をそへ、摺小木に耳をもはやして、自然とふかき字義にも叶はゞ、それも又をかしかりぬべし。

へちまとはへちまに似たで糸瓜哉
〔長春隨筆〕坤市川海老藏は、略中 俳道に心をゆだね、大坂なる椎が本舊徳翁才麿の門に遊びて、俳名を才牛と號し。

〔續近世畸人傳〕五建凌岱

凌岱は、建部氏なれども、建の一字をもちう、はじめ俳諧を業とせる時、淺草門前に住、雷神のかたかたに、風神の袋負へる形をかして、自涼袋と名乗しが、俳諧を止てのち、文字を凌岱とあらたむ、國風の歌文章には綾足と稱へ、晝には寒葉齋と號す。

〔享保集成絲綸錄〕四十五慶安四卯年七月

一之、こ名之異名を附候者有之候は、早々可申上候、いにしへより相撲取候もの異名附候共、向後は其名、堅可爲無用事、

〔百家琦行傳〕二谷風梶之助

谷風は、生國奥州宮城野霞目村の農家の子なり、寛保三庚午年八月八日に産る、幼名興四郎と呼ばけり、幼稚の時より角抵をこのみ、十九歳にて初て秀の山と號り、後伊達が關森ゑもんと呼けり、略中 安永五年廿七歳、谷風梶之助と改名す、

相撲名